勇者鬼丸奮闘記

上条 景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者鬼丸奮闘記

【Ｎコード】
Ｎ４４８４Ｚ

【作者名】
上条　景

【あらすじ】
日々トラブルに巻き込まれやすい主人公、砂山鬼丸。その理由は顔。普通の表情をしていても客観的に見ると睨みつけているかのように見えるその顔が周りからの反感や喧嘩を買うこともしばしば。
そんな主人公が突然この世から姿を消す。
そして次に主人公が目を覚ましたのは今までいた世界とは全く違う世界。そこは魔王がいるファンタジーの世界だったのだ。

序章　プロローグ

ガシャーン！　ズサッ！

夕方の公園。
学ランを着た数人の不良達とフェンスに寄りかかって座り込んでおり、鼻からは赤くドロドロと流した鼻血を拭きながら不良達を見上げる青年が居た。その光景は紛れもなく青年が不良どもに絡まれている光景としか見えない。いや、実はその見た目通り、絡まれていたのである。

「この野郎、ガンたれやがって。気分悪ぃーぞ、コラァー！」

金髪の不良Ａがしわくちゃな革靴で青年の腹を蹴った。

ぐっ！　ごほっごほっごほっ！
「斉ちゃん怖ぇー！　なぁ、金持ってねぇか？　それで許してやっからよ。え？」

青年は蹴られた腹を押さえ呟いた。

「・・・ねぇよ」
「あ？」
「持ってねぇーよ！　クソ野郎共がよ！」

青年は追い詰められながらも決して弱音を吐くことはなかった。

「おお！　斉ちゃん、こりゃ、リンチ決定かな？」

不良Bが不良Aに視線を向けたとき不良Cが公園の入り口の方角を見て目を見開いていた。

「あ、あ、斉ちゃん！　あ、アイツ、もしかして・・・」

「ああ？」

不良Cの震える口調に不良Aは何事かと不良Cの視線の先を見た。そこには一人の学ランの男がカバンを肩に担いでこちらへ歩いてきていた。

「集団で個人を甚振(いたぶ)る。弱い奴がすることだな。そう思わないか？　お前等？」

ゆっくりと歩くその男の周囲の空気は重く冷たいようなイメージを抱かせるもので、中心人物の不良A以外は足が竦んで動けない状態だった。何故なら、その男はこの辺り一帯を取り仕切る番長のような存在の男だったからだ。

「てめぇか、丁度気分が高揚してたところだ。ちょっと相手になってくんねぇか？　いいだろ？」

不良Aが男に宣戦布告をする。

「斉ちゃん、やめた方がいいって」

「うるせぇー！　もうウズウズして仕方がねぇーんだよぉー！」

不良Cの制止を振り切り、不良Aは男に殴りかかって行った。だが、その数秒後、不良Aは顔面血まみれになって倒れていた。それの一部始終を見ていた不良BとCは逃げるように、不良Aを抱えてその場から立ち去って行った。

喧嘩に勝った男は蹲(うずくま)っている青年の下へと歩み寄って行った。

「おう！　大丈夫だったか？　って、血が出てんな。立てるか？」

青年はふらつきながらも男の手を借りずに立ち上がった。

「余計なお世話だ。誰が助けてくれって言った」

「ふっ、頑固な発言だなぁ。こういうときは素直に感謝の言葉を述べるのが普通だと思うけどな？」

「余計なお世話だって言ってんだろ！」

「可愛くない奴だなぁ。あ、そうそう俺の名前は『古賀秀聖(こがしゅうせい)』って言うんだ。今度また絡まれたら名前出してもいいぜ。で、お前、名前は？」

青年は歩みを止め、振り返らず言った。

「オレの名前は『砂山鬼丸(すなやまおにまる)』だ！」

第一章　勇者!?参上!!

「痛ぇ・・・」

翌朝、痛みで目が覚めた鬼丸は布団の中に居た。昨日、公園で不良達に殴られたり蹴られたりボコボコにされた箇所が炎症を起こして痛みを発してしたのだ。

「よっこいしょ!」

痛みで体を起き上がらせるだけでも一苦労だ。

鬼丸は昨日のことを振り返った。

昨日は普通に近所のコンビニまで雑誌を立ち見をしに行こうとした。コンビニに着くとその不良達三人組がコンビニの入り口に座り込んでバカ騒ぎをして通行人の妨げになっていた。鬼丸はそんな光景を遠目から見ていたら、いきなりその不良達に絡まれたのである。

鬼丸にはこんな経験が非常に多い。その理由は目つきが生まれつき悪いことである。普通にしているだけでも通行人は皆道を譲ってくるし、不良にはガンたれているように見え、よく絡まれてしまう。後は、生まれ持った髪質もその原因だろう。色は天然の茶髪で癖っ毛なのである。

こういうこともあり、高校ではしばしば生活指導の教師に目をつけられるのである。入学当初は頻繁に注意されたが、それが天然の物であるということを認識させるのに一年かかったという苦労もある。

で、そんな鬼丸だが、勉強は中の上でテストでは平均七〇点以上は毎回取っているので、教師達からの評価も一年経つと少し変わっ

てきたのである。第一印象が最悪な特徴を持っている鬼丸はそんな努力をコツコツと積み上げて頑張ってきたのである。学校に努力賞というのがあれば、間違いなく彼はそれに選ばれているだろう。

さらに見た目がそんなに不良ちっくだと喧嘩も強いと勝手に噂が広がるが、まったくそんなことはない。格闘技なんてまったく見もしないし、やったこともないし、人も殴ったこともない。ただ言葉は汚い部分があるからか、そういう風に見られてしまうのかもしれない。

というわけで、日常が非常に面倒な生き方をさせられている鬼丸だった。まぁ『鬼丸』なんて悪役のような名前もある意味そういうのにも関係しているかもしれない。そのため、友達という友達はまったくいない。というか迷惑をかけるだけなので、自分から他人を避ける傾向にあるのだ。

洗面所の鏡で顔の傷の状態を確認する。

「ちっ、絆創膏は不可欠だな、こりゃー」

そう判断するな否やすぐに新しい絆創膏で傷を覆い隠す。痛いというのもあるが、そのままにしてると、また朝学校に行ったときに教師達に喧嘩しただろ？　だとか言われかねない。絆創膏で隠しておけば、少なくともその頻度は下がる。余計な苛立ちを溜めずに済むのだ。

そして家を出て学校へ向かう。両親は共働きで朝早くに仕事に向かい最後に家を出るのが鬼丸だった。

今朝も天気がいい。気分が自然と清清しくなるものだ。だが周りからの視線が何故か冷たい。どう見ても冷ややかな目でこちらをチラチラと見てくる。

（またか・・・コイツら・・・）

一瞬で不機嫌になった鬼丸はチラ見していた人々を見回す。すると鬼丸と目を合わせた相手の人達はそそくさとその場から立ち去って行く。

「ったく、何だってんだよ。人のことジロジロと見て。そんでこっちが見たら逃げるって」

「アンタが怖い顔してるからでしょ？」

後方から女性の声が聞こえた。鬼丸には聞き覚えのある声だった。幼馴染の辻堂詩織（つじどうしおり）だ。

「オレ、そんな怖い顔してたか？」

「してたしてた。高校に入って一層怖さが増した気がするわよ。将来は絶対悪役商会に入って悪役俳優志望で行った方が向いてんじゃないの？」

「止してくれよ。オレは普通のサラリーマンでいいって」

「その普通のサラリーマンになれるかが問題じゃない。絶対第一印象悪いわよ」

「その分は何とかカバーすればいいだろーがよ！」

「そんな細かな技術あったら、そんな生傷できてないっしょ」

「うっ！」

詩織は、幼い頃から鬼丸の面倒を見てくれている一つ年上の先輩である。学校の空手部と空手道場に通っていることもあり、昔から目つきの悪い鬼丸に集ってくる不良達を撃破してきた強者なのである。

「ったく、また喧嘩吹っかけられたってわけか。案の定無抵抗でボコボコにされたってところだろうけど、アンタさ、それでいいの？

昔からそうだったけど、やり返そうと思ったことないの？　あと今でも空手やる気はないわけ？」
「ない！　汗流すの面倒だし」

詩織は昔から鬼丸を道場へと誘っていた。だが事ある事に拒否し続けてきたのだ。喧嘩を吹っかけられやすいのにどうして自分を強く磨こうとしないのだろうと詩織は常日頃から疑問に思っていた。少なくとも空手をやっていれば、生傷は確実に減るだろう。そうなれば顔が腫れることもないし、顔の形がおかしくなったりもしなくなるのに。何がそんなに嫌なのだろうと詩織には鬼丸の心の中が理解できなかった。

「やべっ！」

と、その時鬼丸は急に走り出した。
どこへ向かうのかと思った詩織は鬼丸が走って行った先に足に怪我を負っている猫とその猫に向かって直進してくるトラックが目に入った。

「ちょっ・・・！」

詩織が声をかける間もなく、鬼丸はトラックの前から怪我をした猫を助けに入った。トラックと接触はしたもののトラック側も猫と鬼丸の存在に気付き、急いでブレーキを踏んでいたため、鬼丸と猫ともにトラックに轢かれることはなかった。

「あ痛たたた・・・」
ニャー！
「痛っ！」

猫の機嫌を損ねたのか、恩返しどころか顔を引掻かれるという仕打ちを受けてしまった鬼丸。

「ったく！　助けてやったってのに！」

「ちょっと何やってんのよ、もう。また傷増やして・・・」

詩織は鬼丸に駆け寄りカバンに入っていた絆創膏を取り出し、猫に引っかかれた傷を覆い隠すように貼った。

「大丈夫かい？　あんちゃん」

トラックの運転手が慌ててトラックから降りてきて鬼丸に言った。

「あ？」

「ひっ！」

トラックの運転手は鬼丸の顔を見て思わず後ずさりをしてしまった。まるでナイフで脅している強盗と出会ったかのようなイメージだ。

「あ、大丈夫です、大丈夫です。おじさんこそトラックとか体とか大丈夫ですか？」

しょうがないと思った詩織は、すかさず鬼丸とトラックの運転手の間に入った。その瞬間トラックの運転手は天使がやってきたかのような笑顔で必死に謝っていた。

トラックが走り去り、鬼丸は猫にやられた引っ掻き傷を擦っていた。

「っつーか、あのおっさん、シオには謝ってオレには一言も謝って

ねぇーし」
「まぁーしゃーないしゃーない！　そういう運命なのよ。でも驚いたわ。まさかあんなどっかの漫画の主人公みたいな真似をするなんてね」
「仕方ねぇーだろ？　体が勝手に反応しちまったんだから」
「ふーん」

詩織はその時なんとなく鬼丸が何故空手をやりたがらないのか分かった気がした。鬼丸はとにかく人や動物が好きなのだ。手をあげたくないのである。殴るなんてもってのほかだ。鬼丸の見た目は不良そのものだが、長く傍にいる詩織にはようやく彼の心の中が見えてきた気がした。

（こりゃーちょっとやそっとで理解するのは難しいわよねぇ）
「な、何だよ？」
「べーつに」
「訳わっかんねぇーなぁ」

鬼丸と詩織は学校に向かうことになったが、朝からドタバタとした鬼丸はこれから更なるトラブルに巻き込まれることになる。

第一章　勇者!?参上!!その2

高校での午前の授業が終わり、昼休みに校舎の屋上の高台へとやってきた鬼丸。ここが彼のお気に入りの場所でもある。しかも今日は天気がいい。非常に気分がよかった。このまま昼寝もありかな？と考えてしまうほどに心地よかった・・・。

キーンコーンカーンコーン！

（ありゃ？　何か予鈴のような音が鳴って・・・）

何かを思い立ったようにガバッと起き上がり腕時計を見ると、もう昼休み終了の時刻だった。

（いっけねぇー！　いつの間にか寝ちまったかぁー。急いで教室に行かねぇーと！）

鬼丸は急いで高台の壁面に備え付けられている鉄梯子で降り、教室へ向かおうとした。その時だった。

フラッ・・・。・・・ドサッ！

鬼丸は梯子を降りている最中に意識が朦朧として梯子から落ちて背中を強打してしまった。幸い落ちた高さは低くそれほどの怪我を負わずに済んだ。

「痛てて・・・。急がねぇーと！」

教室に向かって走っている最中、先ほどの目眩にも似たあの感覚

は何だったんだろうと鬼丸は考えていた。トラックに当たったときに変なところにでもぶつけたか？　とも思ったが、今はそれよりも教室に間に合うかどうかという瀬戸際で徐々に頭の中がいっぱいいっぱいになっていた。それでも何とか時間には間に合い、席に着くことができた。

昼休みの後の授業は古文。それなりに勉強ができる鬼丸もこの教科は苦戦せざるを得ない教科だった。また、昼休みの後ということもあり、再び睡魔が襲ってきた。とうとう、眠りこけそうなときに古文担当の教師から名前を呼ばれた。

「あ、は、はい！」
「続きを読め」
「え、えっと・・・どこからでしたっけ？」
「教科書一二二ページからだろうが！　ちゃんと授業に集中しなさい！」

先生はそう言うと黒板の方を振り向き何かを書き始めた。一方鬼丸は、指定されたページのところから文章を読もうとした。その時周囲に異変が起き始めた。

「な、何だ？　これ？」

鬼丸も驚いていたが周囲の生徒も驚いていた。鬼丸を中心に教室の床に魔方陣のような光の円陣が浮かび上がり鬼丸を包んでいく。

「な、何だぁー！」

鬼丸はその言葉を残して忽然と姿をその場から消してしまった。黒板に古文の文章を書いていた教師はそのことに気付かず、なかなか教科書の文章を読まない鬼丸に苛立ちを持ち始めて振り返って注

意をしようとした。が、そこには開かれた教科書しかなく本人はいなかった。

「砂山！　砂山鬼丸！　どこ行った？　脱走か？　ったくこれだからああいう奴は信用できんのだ」

（（（いやいや、何か消えちゃってましたけど・・・））））

教室にいる生徒全員が鬼丸の消えていく様を見ていたので、教師の発言に同時に突っ込みを入れていた。

そして鬼丸は気がつくと夜の荒野におり、辺りは松明がたくさん円を描くように置かれ、地面には何やら魔方陣のようなものが描かれていた。

「なんだよ、ここ・・・」

すると何かの気配がした。その方を見ると弱弱しいオババの姿があった。その後ろには大勢の大人や子供が群がっていた。何だか服装がアフリカのどこかの民族のようだが、肌の色は黄色人種のようにも見えた。

大勢の群集の中の一人がこう叫んだ。

「勇者だ！　本当に勇者が現れた！！　今度こそ失敗せずに勇者様が来て下さった！」

鬼丸は訳が分からなかった。完全に頭の中はパニックそのものだった。

（勇者？　何言ってんの？　こいつら・・・っつーか、日本語？）

まだ整理しきれていない。鬼丸はどうやら勇者という扱いを受けるようだ。だが思い当たらない。勇者と呼ばれる理由が。

現地民族のような村人だと思われる群集が一気に魔方陣の中へと集まってくる。

「本当に異世界から勇者様がやってくるとはな。オババの魔術も捨てたものじゃないじゃないか！　なぁーみんなそう思うよな？」

「「「オー！」」」

（何々？　何盛り上がってんの？　全っ然訳が分からないんですけど・・・）

そんな鬼丸を他所に盛り上がりが最高潮になっている村人達。ほとんどお祭り状態だ。

「宴だ！　宴だ！」

さらに盛り上がる村人達だが、一人の者が大声を発した。

「落ち着かないか！　バカ共が！　まだその人物が本当の勇者だと決まったわけではあるまい！」

その男は体格がよく村のリーダを勤める者だった。

「でもオババの召喚魔法で勇者を呼び出せたのは事実ですし・・・」

一人の村人がそう言うと。

「だから言っているだろう。その者は真の勇者かどうかはわからないと。それに奴のその顔・・・もしかしたら、悪魔かもしれんしな。オババ様、勇者の祠へ連れて行かれるのがいいかと思いますが」

年老いたオババは杖を突きながら鬼丸へと近づいていく。

「お主は勇者か？」

「勇者？　そんなこと言われたの生まれて初めてだぜ？」

「うぬ・・・、よし、祠へ連れて確認してもらいましょうぞ」

「分かりました。おい、誰かその方を祠まで案内してやれ」

リーダ格の男が指示すると一人の女性が鬼丸の前に現れた。鬼丸は驚いた。非常に可憐で素敵な女性だったからだ。

「それではこちらです。立てますか？」

手を差し伸べられて思わず戸惑った鬼丸。今までそんなことをしてくれたのは詩織くらいのものだったからだ。鬼丸の前に女性と鬼丸の両脇に若い戦士のような体格をした青年が付いていた。

（さっきのは何だったんだ？　いきなり騒ぎ出したり、いきなり人を勇者だの悪魔だの言い出したり、まったく失礼極まりないぜ）

鬼丸が下を向きながら歩いているとふと前方の女性がこちらを見ていることに気付き驚いた。

「あの、何か付いてる？」

「あ、いえ・・・」

「？」

鬼丸が発言すると女性は慌てた様子で前へ振り戻ってしまった。

（何だよ。そんなにオレみたいのが珍しいのかよ）

しばらく沈黙が続いたが、鬼丸は疑問に思っていることを前の女性に聞いてみた。

「なぁ、道案内のアンタ。ここって日本だよな？　何かの撮影？　こんな荒野日本にあったなんて知らなかったけど、アンタ等の服装も独特だよな。ここどこなわけ？」

女性はこちらをチラチラと見ながら少し戸惑いながら答えた。

「ニホン？　サツエイ？　貴方は私達の知らないことを知っているようですね。どうやら異世界から来たというのは本当のようですね」

「は？　異世界から来た？」

「ええ。私どもは、『タイム』という村で生活しております。そしてこの世界は『ルミナス』と呼ばれています。貴方がいた世界とは違う異世界なのです。私どもが貴方をこの世界に呼び寄せてしまったというわけです。勝手かと思いますが、許していただけませんでしょうか？」

「・・・・・・・・・マジかよ・・・」

「マジ？　どういう意味ですか？」

「あ、いや、何でもない。色々説明すんのも面倒だし」

鬼丸はパニック寸前の頭を整理してみた。

まず、自分は違う世界に勝手に呼び出されてしまっているということ。理由、何故自分なのかはわからない。

次に、ここは日本ではないこと。でも何故日本語なのか？　それもわからない。
さらに次に、さっきの連中は『勇者』と言っていたこと。これはどう考えても、あの『勇者』だろう。ということは自分が勇者で、今から向かう祠で、その適正が解かるってことになる。そうなったらたぶん、展開的に見て、魔王と戦うことになるんではないのか？
鬼丸は冷静に事の分析をしていた。

「なぁ、アンタ。まさかこの世界に魔王なんていたり・・・」
「やっぱり勇者様なんですね！」

鬼丸の質問の途中にいきなり驚いたような嬉しそうな表情をした彼女は鬼丸を見つめていた。

「あ、いや・・・いるんだな？　魔王」
「はい！」

鬼丸は自分の分析の正確さを呪った。まさか予想していたことが現実になるとは。

しばらく歩くとピラミッドのような高さの台形のような形の勇者の祠と呼ばれる場所へと辿りついた。正面には階段があり、それが祠の中腹部分にまで続いている。階段の先には祠の入り口と思われるものが存在している。
松明を持った両脇にいた青年達が祠の階段の両脇にある松明に火を灯すと、一気に階段の両端に火が燃え移り階段を光照らしていった。

「あの祠の中には何があるんだ？」

女性は答える。

「神の使いがいらっしゃると言われております」

「神の使いがいると言われている？　誰も中には入ってないのか？」

「ええ、何せ勇者の祠ですから、かなり神聖な場所なのですよ」

「そうなのか」

鬼丸は少し身構えた。突然訳の分からない場所に連れて来られて、勇者だとか悪魔だとか言われ、挙句の果てには魔王の存在。もうどうでもよくなっていた。

（クソ！　もうどうにでもなっちまえ！）

鬼丸は歩みを進めた。祠の階段を一段一段登っていく。まるで小さな山を登っている感じだ。足に負担がかかってくる。少し疲れた頃、ようやく祠の入り口までやってきた。

（さて、鬼が出るか蛇が出るか。神の使いって言ってもそれが真実かどうかもわからんしな。ま、行くっきゃねっか！）

鬼丸は覚悟を決めて祠の中へと足を踏み入れるのであった。

第一章　勇者!?参上!!その3

祠に足を踏み入れるとそこは真っ暗闇な空間が広がっていた。鬼丸は広さを確かめるために声を出してみたところ、大きく反響してきた。どうやらそれなりに広い空間ではあるようだ。

（さて、どーするか・・・）

鬼丸はまだ祠に一歩足を踏み入れたに過ぎない。すぐ後ろには出入り口がある。

（このまま奥に入って、いきなりガァー！　っていって出入り口を塞がれたりしないよな・・・？）

祠の妙な静けさに鬼丸の心臓の音はドクドクと自分の耳に聞こえるほど鳴っていた。

（よし！）

鬼丸は覚悟を決め、祠の内部の中心部へと歩み寄ってみることにした。暗くてわからないが、大体中心部に来ただろうと思った瞬間。

ガン！

「痛てっ！」

鬼丸の膝に何か堅い物がぶつかった。暗闇の中手探りでそれを触ってみると灯篭のような台座のようなそんな形をしている物がそこにはあるようだ。

（何だ、こりゃ？　ちぇっ、松明持ってくればよかったかな）

と、次の瞬間恐れていたことが起こってしまった。

ガーーガコン！

出入り口を塞がれてしまったようだ・・・。

「なぁーーーー！　真っ暗じゃねぇーか！　で何でこう悪い予想ばかり当たるんだ！　どーなってんだ！　この祠は！」

鬼丸は怖さのあまり祠の中央部にある突起の台座？　灯篭？　にしがみ付いていた。この時鬼丸は、罠にハマった動物の気持ちが少しわかるようになっていた。

（だぁーーー！　これからどーすりゃーいいんだよぉー！）

すると祠の中にポッと光が次々と灯り始めた。松明とは違う光だ。とても幻想的に見える。

辺りが明るくなり、鬼丸はしがみ付いていた台座から離れ、祠の中を見回していた。祠の壁面は明るさのせいもあるのか、金のような輝きを見せていた。広さも想像していたよりも広い。天井まで何メートルあるだろうか。

そんな辺りを見回していると、天井から一つの光の玉がフラフラと揺れながら鬼丸の方へやってきた。

鬼丸はその光の玉に触ろうとすると光がパッと弾けた。すると驚いたことにそこには、光のような、ガラスのような、プラスチックのような、七色に輝く羽を背に付けた一目で妖精と表現した方が解かり易い普通のぬいぐるみくらいの大きさの生き物が現れた。

「な、何だ、お前？」
「何だとは失敬な。私はこれでもれっきとした天使ですよ。勇者のお供をするよう天上界から言われてここまでやってきたんですから、もっと敬う姿勢が欲しいですね」

見た目のかわいいキャラと違いなんだか偉そうな天使に早速悪いイメージを持った鬼丸だった。もちろんそれはお互い様のようで。

「あなた、本当に勇者ですか？　その悪魔のような顔・・・とても信じられません」
「だぁーーーー！　黙って聞いてれば言いたい放題言いやがって！　てめぇこそ何だ！　そんなりで天使だと？　まだガキじゃねぇーか！　あ？　オレはな、一刻も早くこの世界からおさらばしたいんだよ！」
「それは無理です」
「あ？　何で？」
「魔王を倒さない限り、貴方の世界への扉は開くことはできないことになっています」
「な、何ぃーーーーーー！？　どういう理屈だ、それ！」

天使は困ったような表情をして言った。

「まぁーなんというか、途中で投げ出されても困るというものなので、強制的に帰れなくさせてもらってます」
「お前等が悪魔に見えてきたぞ、俺には」

鬼丸は肩をガックリとさせてブツブツと独り言を言っていた。

「ごちゃごちゃとうるさいですね。勇者ならもっとドンと構えてくださいよ」

「できるかぁー！　第一オレは勇者なんかじゃねぇーっての！」
「いえ、あなたは勇者ですよ」
「あ？　何でだよ？」
「あなたがいた世界からこの『ルミナス』に召喚される人間は勇者と決まっているのです。第一、古賀家の人間ならば当然でしょう」
「は？」

聞き間違いだろうか？　今天使は『古賀家』と言ったような気がしたと鬼丸は思った。

「ちょ、ちょっと待て！　古賀家の人間が勇者ってどういうことだよ？」
「先代から何も聞いてないのですか？　困った先代勇者ですね。いいでしょう。説明します」

天使はかつて、勇者がこの『ルミナス』にやってきて世界を救ったという話をし始めた。時は今から一〇〇〇年以上も先に遡る。

かつての『ルミナス』は戦乱で世界が大きく荒れていた。主に、人間と魔族との対立だったという。日常が戦争で人々はかなり疲弊していたという。このままでは魔族に一気にこの世界を制圧されてしまうと考えた人々は助っ人として、別世界から勇者の素質のある人間を召喚することを思いついた。但し、勇者。これに該当するのはこの世界でもっとも強く聖なる強さを持った者でなければならない。果たして別世界にそんな人間はいるのかと誰もが不安がったが、何人もの魔導士達が集まり勇者召喚の儀式を行なった。
その結果、一人だけ該当する人間が別世界にいた。それが、鬼丸のいた世界の『古賀平蔵（こがへいぞう）』という武士だった。彼は剣客として当時

の戦国時代では最強と言われるほどの猛者だったのだ。平和を愛する平蔵は『ルミナス』での勇者に抜擢されたわけだ。
ここで、鬼丸がいる世界の戦国時代と『ルミナス』の戦乱時代との時代年差があるが、これはそれぞれが別世界であるため、時間の経過も世界によって違うのである。
ともあれ『ルミナス』での人間と魔族との戦乱は平蔵の参戦により、戦況は人間側の優勢に傾き、魔王を封印することに成功したという。

「封印？　倒したんじゃないのか？」

鬼丸は当然の疑問を天使にぶつけた。

「ええ、まぁー記述ではそうあります。私は当時の担当ではありませんでしたから詳しい事情は知りません」
「つーか、そこ重要だろうよ。だってさ、その封印された魔王が今蘇ってるわけだろ？　何で封印したのか？　あと何で封印が解けたのか？　その辺ちゃんと調べてこいよ！」

さすがに鬼丸に正当な意見を言われ、少々反省した天使だったが。

「ま、それは置いといて」

天使は開き直った。

「おい！　置いとくな！」
「仕方ないでしょう？　知らないものは知らないのですから・・・。これ以上無駄な論議をしてる暇はないんですよ」
「こんにゃろー、どこまでもムカつく奴だぜ。天使じゃなかったら

即殴り飛ばしてるところだ」

天使は鬼丸の言葉をスルーして話を続けた。

魔王は封印され『ルミナス』には平和が訪れた。そのため、お役御免となった勇者、古賀平蔵は当時の天使の手によって元の世界へと戻ることになった。そのとき天使から条件として一つだけ平蔵に提示したことがあった。それは、この出来事を古賀家の後継の者にだけへと伝えるという役目だった。もちろん古賀家以外は他言無用として。

その理由としては、当時の天使は魔王を封印したため、いつかはその封印が何らかの形で解けてしまうのではないかと恐れたためだ。何故なら魔王は人間にしか倒せないからだ。

「人間にしか倒せないって、どういうことだよ？」

「私が説明してるときによく質問しますね。ま、その方が後でまとめて聞かれるよりはいいでしょうか。」

「さっさと説明しろ！」

鬼丸は怒りのゲージを溜め始めた。

「はいはい。まず、あなたは魔王という存在を恐らく勘違いしてはいませんか？」

「は？　魔王ってあれだろ？　魔族達の親玉で魔界とやらの支配者的な存在とかじゃねぇーの？」

「やっぱり・・・」

天使は大きく溜め息をついた。

「いちいち反応がムカつくんだよ！　おまえは！」

「いいですか？　よく聞いてくださいよ。この世界にいる魔王というのは元々は人間の負のエネルギーが元になっているんです。魔獣や魔族もそうです。負のエネルギーを大量に摂取してしまった動物や人間がそうなったんです」

「負のエネルギー？　何だよ、それ」

鬼丸は真剣な表情になって質問した。

「この世界は人間の感情に敏感でして、例えば、恨み・憎しみ・悲しみ・怒りなどの負の感情が体から煙のようにエネルギーが出ていき、世界中に溜まってしまうわけです。その浄化が追いつかなくなってしまってそういった者達が生まれてしまうというわけですね」

鬼丸はふと考えてみた。

「ってことはだ。オレのいた世界に魔王なんてのがいなかったのは、その浄化が上手くできてるからってわけか？」

「ほう、バカっぽい顔の割りによく理解してますね」

「一言多いんだよ、お前は！」

鬼丸の怒りのゲージはさらに上がった。

「で、あなたには魔王を倒すこと以外にもやってもらいたいことがあるのですよ」

「無視かよ！　で、やってもらいたいことって、もしかしてその浄化が関係してんのか？」

「察しがいいですね、アホっぽい顔してるのに」
「だから、一言多いって言ってんだろ！」

鬼丸の怒りゲージさらに上昇。

「浄化は精霊が行なっています。ただこの世界の精霊の力が弱ってきてしまっているわけです。そこで、精霊界からエネルギーをこの世界へ注入して精霊達に元気を分け与えてもらいたいわけです。やり方はそのとき説明しますので」
「はー。何かやること多いんだな、勇者って」
「仕方ないでしょ、これが古賀家に生まれた者の使命ですから」
「ってーか、その『古賀家』ってさっきから出てきてるけど何？」
「何って、あなたは『古賀秀平（こがしゅうへい）』でしょう？　自分の家の苗字もわからないほどアホなんですか？」

鬼丸の怒りゲージは上がらず留まっていた。

「？　は？　オレが『古賀秀平』？　何言ってんだよ。オレの名前は『砂山鬼丸』だぜ？」
「？？　は？　何をおっしゃってるんですか？　『古賀秀平』という名前でしょう？　頭でも打ったんですか？」
「？？？　いや、ちょっと待て。オレの名前は正真正銘の『砂山鬼丸』だ。その『古賀秀平』なんて名前じゃねぇ」
「・・・・・・・・・・・」

天使は目が点になった。その後、手元に資料を出現させ、パラパラと資料を捲っていく。

「お、おい」
「ちょっと待ってください。・・・お兄さんがいますね？」

「いや、一人っ子だけど・・・」
「・・・血液型はB型・・・」
「O型だな」
「・・・高校一年生ですね？」
「高二だな」
「・・・・・・・・・」
「次の質問は？」
「古賀秀平という・・・」
「砂山鬼丸だ！」

その瞬間、天使は色を失い真っ白になった。

「こ、こ、これは、ま、ま、まさか、ひ、人違いというやつでしょうか？」
「ま、そんな感じだよな。で、どうすんの？」
「ど、ど、どうするって・・・ど、ど、どうしましょう・・・」
「とりあえず関係ねぇーんなら帰りたいんだが・・・」

鬼丸の怒りゲージは最高潮に達していた。
一方の天使はテンパッて祠の中をハエのようにブンブンと鬱陶しいくらいに飛び回っていた。

第二章　新たなる動き　その１

鬼丸がいた世界では、鬼丸が突然目の前から消えてしまったということで『平成の神隠し』という見出しで、報道関係者らは世間に報じていた。この事件を担当していた刑事達もはたはた困り果てていた。何せ、神隠しに遭った被害者は、クラスの生徒全員に消える瞬間を目撃されていたからだ。目撃者がこんなにも多いということで、神隠しなんてオカルト的な可能性は普段なら絶対に捜査に持ち込まないのだが認めるしかなかった。まさか、クラス全員が彼を拉致した、もしくは拉致に協力しているなんて馬鹿な話はないだろう。被害者の砂山鬼丸は集団いじめを受けてはいないという事実もあるし、何よりそんな馬鹿馬鹿しいことをクラスメイト全員で供述しているのもおかしすぎる。彼等が見たのは事実だと思うしか今は情報がなかった。

現在、クラスメイトは全員の事情聴取を取って帰宅させた。だが、彼の幼馴染という辻堂という女子生徒がまだ現場にいた。現場担当の刑事である『伊集院誠二（いじゅういんせいじ）』は彼女の下に近づいていった。

「君、もう帰りなさい。事情聴取ならもう取ったし、砂山君のことが心配なのはわかるけど、ここで君ができることは何もないのではないのかね？」

詩織は刑事の顔ではなく、鬼丸の席をじっと見ていて返答がなかった。

「よう！　辻堂じゃねぇーか！」

突然の呼び掛けに振り向いた詩織。

「え？　古賀先輩？　どうしてここに？」
「おまえこそ何やってだよ？」
詩織は少し沈黙してから答えた。
「神隠しに遭ったのは私の幼馴染なんです」
「そっか。そりゃー心配だろーな」
「はい・・・。先輩は？」
「ああ、実はよ・・・」
「何だね、君は！　事件の関係者以外は立ち入り禁止のはずなんだがね」
古賀の言葉を遮って伊集院は彼に注意をした。
「ああ・・・えっと、ここへ来た理由を話したら外の警官の人が入れてくれたんですよ。って、あなた、もしかして伊集院さん？」
「ん？　ああ、そうだが、何故知ってる？」
「ほら、前にウチの道場から出稽古しに行ったでしょ。おじいと一緒に」
「出稽古？　古賀？　・・・！　もしかして、古賀空手道場の『古賀平八（がへいはち）』師範のお孫さん？」
「そう！　そうっすよ！」
「そっか。確か名前は『秀聖』君だったね」
「はい、あの時はお世話になりました」
「で、今日は何でここに？」
伊集院刑事は詩織がした質問を繰り返し彼にも聞いた。
「それが、今回の神隠し事件・・・もしかしたら心当たりがあるかもしれないって、ひいじいとおじいが言ってたんで、現場を確認し

に行ってこい！　って言われて来たんすよ。現場見られますか？」
「んー、まだ現場検証中だがらねぇ。鑑識が撮った写真があるからそれを持って行ったらいいよ。後、私も付いて行っていいかな？事件の真相が明らかになるなら私の出番でもあるしね」
「分かりました。行きましょう。お前も来るか？」

伊集院刑事と秀聖の会話を静かに聞いていた詩織は今までの表情が嘘のように。

「はい！　行きます！」

そして一行は、現場写真を持ち、古賀家へと赴くことになった。

一方、ルミナスのタイム村近くにある勇者の祠では、冷静になった天使と呆れた勇者が途方に暮れていた。
さっきまで祠の中を飛び回っていた天使は、しばらくすると落ち着きを取り戻し台座に腰掛けた。そして勇者鬼丸の方はというと、帰れない苛立ちが最高潮に達していたが、さすがの天使の戸惑いに完全に怒りを通り越して呆れ果てていたのである。

「おい！　さっきはクセぇー物に集るハエみたいに飛んでた奴がいきなり、そんなとこに座りこんで何やってやがる？」
「調べものです」

天使は、台座に座り、端的に答えながら透明な液晶パネルのようなものを目の前の空間に出現させ、何やらピッピッピッと操作していた。鬼丸はというと祠内部に胡坐をかいて座りこんで天使を睨み

つけていた。

「なるほど！」

「何が『なるほど！』なんだよ！　何か分かったってことか？」

鬼丸は立ち上がり、天使の方へと近づいていった。

「いえ、さっぱり」

ゴツン！

鬼丸はついに耐えかねて天使に手を出してしまった。だが天使は痛がる様子はなかった。

「一応言っておきますが、貴方の今のレベルは一です。攻撃力もまだ貴方がいた世界のままなので、殴られても大した痛みはありません。まぁー天使に手を出したというのは今回は見逃してあげますが、本来はあってはならないこ・・・」

「だぁぁぁぁぁぁぁぁーー！　うるせぇー！！　さっきから何も進展してねぇーってのが一番頭に来てんだよ！　天使ならさっさとなんとかしろ！」

さっきから何も進展していないことに怒り心頭の鬼丸。天使は冷静に答えた。

「ただ、これだけははっきりしてます」

「な、なんだよ？」

「もちろん、貴方がこの世界を救う勇者に選ばれたということです」

「な、おい！　ちょっと待てよ！　本来はオレじゃないんだろ？」

「そうですけど、来てしまった以上仕方ないですね。頑張って勇者やってください」

「てめぇ、そんないい加減な理由で勇者なんてやっていいのかよ？」
「とりあえず問題ないはずです。勇者の祠にも普通に入れてますからね」
「？　普通に入れてる？　どういうことだ？」
「貴方はこの祠の下が気になりませんでしたか？　階段を登ってここまで来たでしょう？」

鬼丸は考えた。確かに階段を登り祠の中腹に入り口があった。そういえば、今居るこの場所は少し高いところに位置しているはずだ。下には何かあるのだろうか？

「まさか、適正に満たしてないと落とし穴でもあって落下するとか言うんじゃないのか？」
「おお！　よく分かりましたね。ま、神聖な場所なのでトラップなども用意してるんですよ」
「なんちゅー古典的な罠だ・・・。で、下には何があるんだ？」
「秘密です」
「神聖な場所だからか？」
「はい」
「はぁ～」

鬼丸は天使との会話に疲れ始めていた。もう勇者だろうが何だろうがどうでもいいや。そんな気分だった。どうせ帰れないのならばこの世界で何かやるしかないだろう。鬼丸はこの世界で勇者をやることを決意し始めていた。

「では、私は調べものがありますので、一度天上界へ戻ります。それでは・・・」
「ちょ、ちょっと待てぇ！」

飛んでいく天使の足を掴み、飛び去るのを止めた。

「い、痛い！　何ですか？　一人になるのが寂しいんですか？」

「違うわ！　こんな祠に閉じ込められたまま、いつ戻ってくるかわからんお前を待ってるなんてことできるか！　扉開けろ！　扉！」

天使は溜め息をした。

「仕方のない方ですね。わかりましたよ。あ、忘れてました。まだ洗礼を受けてませんでしたね？」

「あ？　洗礼？」

「はい。いわゆる病気になって死なないようにするための血清を打つってことです」

鬼丸は一瞬不安になった。

「な、死ぬ？　何でだ？　確かに昔から体は弱かったが・・・」

「だったら尚更ですね。いいですか？　この世界は貴方がいた世界とは違う世界です。当然空気中に含まれる菌類の種類も世界によって違います。普通異世界から来た者は、まず死に直面するほどの病気にかかります。当然ですよね？　免疫が体にありませんから。だからこの祠で洗礼と言う名の血清を打ちます」

「ほ、ほう。なるほどな・・・」

鬼丸は些かビビリ始めていた。

（そ、そっか。死ぬところだったのか・・・あぶねぇ）

「では、天上界に戻る前に洗礼を済ませちゃいましょう」

「お、おう」

天使は宙に舞うと鬼丸の頭上にやってきた。鬼丸は少し緊張しながら待っていると、天使は何やらブツブツと言いながら、両手から光の粒のようなものがキラキラと鬼丸を包んでいく。

「はい、終わりです」
「は？　もう？　血清は？」
「しましたよ？　さっきの光が皮膚から体内に入って血清を注入されました」
「ほ、ほう」

ここで初めて鬼丸は天使を敬い始めていた。

「では私はこれにて・・・。扉は開けておきましたんで自分で持ち上げて戻ってくださいね」
「なぁ、オレはどうすればいい？」
「とりあえずタイム村で滞在していてください。修行するなりは自由です。ただ、病気になるでしょうし無理はしないよう。天上界から戻ってきたらタイム村へ直行しますので」
「分かった」
「では」

天使は眩い光に包まれ、祠の天井の方に向かいその姿を消した。鬼丸はさっそく祠の扉を持ち上げようとしたが、ここで気付いた。

「重くねぇ？」

結果、鬼丸は扉を開けるのに汗だく、筋肉痛という天使からのサプライズプレゼントを受け取ったのだった。

第二章　新たなる動き　その２

伊集院刑事一行は、伊集院刑事の覆面パトカーで古賀家に到着した。

「おーい！　おじい！　連れてきたぜ！」

秀聖は事前に携帯で刑事と詩織も自宅へ招くということを平八に連絡していたのだった。早速一行は、古賀家へお邪魔をし、秀聖の案内の下、客間へ案内した。

「んじゃ、ひいじいとおじい呼んでくるんでちょっと待っててください」

秀聖はそう言うと廊下の方へ消えていった。

この古賀家は平屋を増築し、二階建てにした屋敷で、古くから存在しているのだという。なんでも、祖先は優秀な武道家だったらしく、将軍にも仕えていたとなんとか・・・。とりあえず古賀家は、由緒ある家の一つだった。今は、この広い家の他にさらに広い敷地内に空手道場が併設されている。

秀聖が戻り、しばらくして二人の老人がやってきた。一人の老人は秀聖の曾お祖父さんらしいのだが、元武道家だからか一〇〇歳を過ぎても非常に元気そうであった。ただ難点なのは耳が遠いらしいとの説明が秀聖からあった。

「ご無沙汰してます、平八師範。以前はお世話になりました」

伊集院刑事は平八を見つけるや否やすぐに反応した。

「おんや？　誰だったかな？」
「ほら、前におじいと警視庁に出稽古行ったろ？　あのときにいた伊集院刑事。ま、大勢いた一人だから覚えてないだろうけどな。とりあえず、今回の事件の担当刑事だから同行してもらったんだ」
「ほう、そうか。そりゃ、どうも、どうも」

お互い軽く挨拶を済ませて本題に入ることに。

「んじゃ、ひいじい、おじい。アレ出してくれや」
「ほいほい、そう急かさんでもゆっくり・・・」
「ゆっくりしてられっか！　人一人が消えてんだぞ！」

秀聖が大声を上げたとき、ひいじいが口を開いた。

「確かに今回の神隠しは予想外のケースじゃからな。事は急いだ方がいいかもしれんなぁ」

ひいじいはそう言うとテーブルに一冊のかなり古びた本を出してきた。

「この本が今回の事件を解決に導くものなのですか？」
「ああ、伊集院さん。ひいじいが言うにはそうらしい。じゃ、こっちも現場写真を出しましょう」

テーブルには茶色い本と数枚の現場写真が並べられた。

「この本は随分と色あせていますが、一体いつ頃のもので内容はどんなものなんですか？」

伊集院刑事は恐る恐る古びた本を手に取り、平八に聞いてみた。

「書かれた時代は戦国時代と言われております。著者は我々の先祖にあたる『古賀平蔵』という剣客です。内容は異世界ファンタジーとでも言った方がいいんでしょうか・・・ワシらにはわからないのですが、秀聖がそう言っておりましたわ」
「異世界ファンタジー？　随分と現代的な内容なんですね。戦国時代に書かれたというのに・・・」

そこで秀聖が答える。

「俺もその本を直接読んだ訳じゃないんだが、ひいじいに本の内容を聞いたイメージだとそんな感じだったんだ。確かに戦国時代に書かれたにしては随分と時代離れしてると俺も思いましたよ」

そこまで沈黙を保ったままだった詩織が言葉を発した。

「で、その異世界ファンタジーの内容はどんななんですか？」
「よくありがちな内容だよ。この世から異世界に一人の人間が召喚されて、召喚された世界で勇者として魔王と戦うって話さ。主人公は『古賀平蔵』本人なんだってさ」
「召喚・・・もしかしてそれが・・・」
「そう。神隠しっすよ」

伊集院刑事は思った。

（すると、古賀平蔵は神隠しに遭い、異世界に召喚された。そしてこっちの世界に再び戻ってきたということになるな。まさか、今回の神隠しも召喚によるものだとしたら、アレがその証拠になるかもしれない）

伊集院刑事が考えていたアレとは、現場写真の中にあった。丁度、ひいじいがその写真を見て目を見開いていた。それを目にした秀聖が驚き聞いた。

「どうした？　ひいじい！」

「こ、この円陣は・・・」

一同がひいじいの言動に尋常ならざるものを感じ、ひいじいが持っていた写真を全員で見た。そこには、教室の床に刻まれた焼け焦げた円陣があった。明らかに誰かの手によって手が加えられた状態にある床は正しく、鬼丸の立っていた場所だったのだ。この円陣は丸い円が三重になっており、その中に六芒星が描かれていた。

「こんな分かりやすい跡が残ってるのに何でこれが怪しいって気付かなかったんですか？」

詩織は少し苛立ち気味に伊集院刑事に質問した。

「いや、そりゃー怪しいとは思ったさ。でもね、こんな魔方陣のような円陣が一体何を表しているかなんてわからなかったから・・・」

ひいじいは伊集院刑事から古びた本を渡してもらい、ペラペラとページを捲り始めた。そしてあるページで手を止め、皆の前にその本のページを見せた。そこには、三重の円に六芒星の魔方円陣があった。説明には『聖なる力を持ちし者を召喚させる』とあった。

「嘘だろ？　これって現場写真の円陣とまったく同じ円陣じゃねぇーかよ」

「聖なる力を持ちし者を召喚させる？　『聖なる力』って何のことなんでしょう？」

伊集院刑事はその用語に疑問を持ったが、すぐにひいじいが返答してくれた。

「勇者のことじゃよ」

「勇者？」

秀聖が補足説明をする。

「昔から耳にたこが出来るほど聞かされてきたんだが、どうやらウチの家系って異世界で言うところの勇者の家系らしいんすよ。だから要約すると、有能な古賀家の人間を召喚させるという意味なんじゃないかって考えられてます。推測に過ぎないですけど・・・」

そこで詩織が発言した。

「だったら鬼丸が召喚されたのって、おかしくないですか？　アイツ砂山家の人間で古賀家とは縁も所縁ないですし」

「鬼丸？　ひょっとして召喚されたお前の幼馴染って『砂山鬼丸』だったのか？」

「そうですよ？　って、先輩なんで鬼丸のことを？」

「ああ、昨日偶然公園の前を通りかかったら、なんだかボコボコにされてたから見ても立ってもいられなくてな。その時ちょっと話した。そっか、アイツだったのか」

「ああ、ごめん。話を事件の方に戻させてもらってもいいかな？」

「「あ、すいません」」

居間にいる、ひいじい、平八、伊集院刑事、秀聖、詩織は、平蔵が記した本の解読を進めていき、事態の整理と把握、今後の対策の検討などをしようと平蔵の本の解読に奮闘していた。

ルミナス、タイム村で鬼丸は莫蓙を敷き、掛け布団のような布をかけて横になっていた。別に病気になったわけではなく、ただ単に外が夜中だからという理由だった。

勇者の祠から出てきた鬼丸はこれからどうするかと考えていると階段の下の方で松明の灯が点いているのが見え、急いで降りていくと、祠まで案内してくれた女性と付き添いの青年二人がいた。どうやら鬼丸が出てくるまでずっと待っていたようだった。

「待っててくれたのか？」

「はい。勇者様をタイム村まで案内しなければなりませんし」

「で、でも、オレが勇者じゃなかったらあそこから出て来れなかったかもしれないんだぜ？」

「信じてましたから。私達の世界を救ってくださる方だと信じてましたから。それに、現に出てきてくれたじゃありませんか」

彼女は終始素敵な笑顔で鬼丸と会話をしていた。どうやら本当に心から勇者だと信じているようだ。鬼丸はそんな彼女を見ていて罪悪感を感じていた。人違いとはいえ、勇者として召喚されてしまったこの世界には今までどうなっても構わないとも考えていたが、彼女の純粋な笑顔を見ているとどうしてもこの世界の現状を放っておけなくなっている自分がいた。

（もう面倒くせぇなんて言ってらんねぇーな・・・。こうなったのも何かの縁なんだろうけど・・・勇者・・・バカバカしいと思ってたけど、結構勇気いることだよなぁ）

鬼丸は床につき、天井を見ながら考え、ある事を決意することになった。

（こうなったらやってやるか！　もう前に進むしか道がねぇーんだから！）

翌朝、鬼丸は決意の眼差しでタイム村のリーダー格の男の家を訪ねることに決めた。もちろん、自分を強く鍛えるためだ。今までは面倒なのは嫌だと駄々をこねてきたが、今はもうそんな気持ちはまったく無くなっていた。この世界に来て少し心が成長した鬼丸だった。

第二章　新たなる動き　その3

平蔵の記した本の内容は、現代ファンタジーそのものだった。改めて皆、これが戦国時代に書かれたという事実はとても信じられないといったところだった。だが、この本に書かれた事実こそが、この世界とは違う異世界が存在するという確かな証拠となっていた。

「この本に書かれていることが全て本当のことだとすると、砂山君は相当な試練に立ち向かうことになるだろうね」

「刑事さん！　他人事みたいに言わないで下さい！　鬼丸は人違いで異世界に飛ばされたんですよ！？」

「だが辻堂。ここに書かれていることが本当なら、最終的に魔王ってやつをどうにかしなきゃ戻って来れないようだぜ？　俺が向こうに行ければ何か助けになるだろうが・・・」

「それは不可能に近いぞ、秀聖」

「何でだよ？」

「こちらから向こうへ行くための方法がないのじゃよ。向こうからの呼び出しがないとおそらく無理じゃろうて」

「じゃー、少なくともこっちから連絡を取る方法はないのかよ？」

「それも不可能じゃろう。こちらの世界とあちらの世界の干渉はできないようにされておるようじゃしな。深い理由はわからぬがな」

「んじゃー、どうしようもないじゃねぇーかよ！」

「確かに・・・我々警察にできることはなさそうだね・・・」

居間にいる皆で議論している中、一人沈黙を守っていた、ひいじいが静かに口を開いた。

「この書物には書かれてはおらぬが、古から我が古賀家が守り続けている代物がある・・・」

その場にいた一同は一斉にひいじい発言に反応し、目を見開いてひいじいに視線を移した。

「何だよ、それ？　そんなもんが他にもあったのかよ？」

「焦るな、秀聖。この書物に関連する物とは限らん。ただ、ワシの祖父から譲り受けた物であってな。その物自体も見たこともない」

ひいじいはゆっくりとした口調で静かに言葉にした。

「先輩の家、由緒正しい古い家だから他にも何かあるかもしれませんね」

「確かにな。ひいじいやおじいも知らねぇーこともあるかもしれねぇーしな。ちっと早ぇーが、蔵の大掃除といくか！　ついでに秀坊も呼んでくっか？」

「秀平君いるんですか？」

「いるぜ。いつも帰ってくるなり部屋に篭ってるから気分転換がてらに外に出るのもいいだろうって。んじゃ、ちょっと待っててください」

秀聖は弟の秀平を呼びに部屋に向かった。秀聖が部屋の前に行くと秀平の部屋の中からテレビゲームの電子音が聞こえてきた。秀聖もよくは知らないが、最近の秀平は昔の古いＲＰＧにハマっているようだった。

「おーい！　秀坊！　ちっと蔵の大掃除すっから外出てこねぇーか？」

「・・・・・・・・・・」

秀平の部屋の中からは変わらずゲームの電子音が聞こえてきてい

る。

「おい！　秀坊！」

秀聖は秀平の部屋の襖を開けた。そこにはテレビ画面をボーっと見て、コントローラを握る手は素早く指が動いていた。つまり、秀聖の声を完全に無視していたのだった。

「いんじゃねぇーか！　返事ぐらいしろよ！　いつもいつもだんまりでよ」

「勝手に入らないでよ、秀兄。うざいから」

ムキッ！

「てめぇー、いつもいつもその態度・・・少しは直せよな。友達できねぇーぞ！」

「余計なお世話。友達なんていらない。それと外にも出ない。はい、これで終わり。出てってよ」

秀平はテレビ画面を見ながら興味無さ気に淡々と応対した。

「はっ、そうかよ！　じゃー好きにしろ！」

「言われなくてもそのつもり」

秀聖は秀平の部屋を出た。そこには詩織がいた。

「相変わらずですね、秀平君」

「ったく、誰に似たんだか。あの性格変えないとマジやべぇー気がする」

「先輩も相変わらず弟想いなんですね。でも無理やりは可哀想なので、今回は私達だけでやりましょうよ」

「仕方ねぇーな。行くぜ」

秀聖と詩織は秀平の部屋の前から去り、異世界へ干渉できる何かがないか探すため、蔵の方へと向かっていった。

鬼丸はタイム村のリーダー格の男の家の前にいた。この村の家はどの家も蔵のような高床式の家で、それぞれの家の壁には小船が備えつけられている。鬼丸はこの村に初めて入ったとき案内で付き添っていた彼女にその理由を聞いていた。どうやら、近くにあるデカイ河がある時期になると大規模に氾濫することがあるらしく、この辺りは地形が窪んでいるため、水が溜まり湖のようになるんだとか。なら、どこか別の住みやすい場所に村を移せばいいのでは？　と鬼丸は彼女に質問したのだが、彼女が言うには先祖から代々この地を守る義務がこの村にはあり、この地で何があろうとも住まなければならない掟があるのだと聞かされていた。

鬼丸は家の入り口まで繋がる階段を登り、家の扉をノックした。すると中から男らしい渋い声が聞こえて扉が開いた。

「何だ、貴方でしたか、勇者様」

「あのさ、その勇者ってのやめてくんない？」

「では何とお呼びすれば？」

「鬼丸って呼んでくれればいいんだけどよ。後な、敬語もやめてくれねぇーかな？　オレなんて、てんで弱いただの人間なんだしさ」

「しかしですな、鬼丸様」

「だから！　様とかやめてくれって！　こっ恥ずかしくてしょうがねぇーって」

するとリーダー格の男は微笑みを浮かべこう言った。

「わかった。これからは鬼丸殿と呼ぼう。これで良いかな？」
「ああ、それなら変な鳥肌立たなくていいや」
「で、何用かな？　まさかそれだけのためにここへ来たわけでもなさそうだが・・・」
「そうなんだ。最初見たときからアンタならって思ってた。オレ強くなりてぇーんだ！　オレを鍛えてくれねぇーかな？」
「私が、鬼丸殿を？」
「ああ、頼む！」

鬼丸はリーダー格の男に頭を下げた。人に頭を下げたのなんて何年ぶりだろう・・・いや、思い返しても頭を下げた経験など思い当たらない。だが、鬼丸は今リーダー格の男の前で頭を下げている。もしかしたら生まれて初めての行為かもしれないことを。この行動こそ鬼丸の心の変化を物語っていたのである。

「ふむ・・・、ちょっと失礼」
「ん？　な、何だ？」

リーダー格の男は鬼丸の体を触り始めた。腕・肩・背中・胸・腹・足と筋肉の付き方を確認しているようだった。

「う～ん。もっと鍛えた方が良さそうだな。とりあえず鬼丸殿の申し出は引き受けよう。しかしこの体では狩りができん。しばらくは基礎体力と筋力の増強が必要だろう」
「それって筋トレとかか？」
「筋トレ？　んーよくわからないが、私の言ったことを守ってくれるかな？」
「ああ、もちろん！　で、何からやればいい？」
「じゃ、河へ行って水を汲んできてくれないか？　私の家の分以外

にもこの村全部の家の水をね」
「いっ！　マジ！？　そんなにかよ？」

鬼丸はこの時頭を下げて頼み込んだ相手を間違えたと後悔していた。やはりリーダー格の男は見かけ通り、言うこともハードな内容だったのだ。

「はははは、それくらいはできないとここでは生活すらできませんぞ」
「かぁー、そういや水道とかなかったもんな。なんか縄文時代にタイムスリップしてきた感じがするぜ・・・いや、タイムスリップみたいなもんだよな、これ」
「さぁー、四の五の言わずにやってくださいな！　これも修行ですぞ！」
「うっ、それを言われるとやらざるを得ないな・・・。えぇーい！　何でも来いってんだ！　水汲みやってやる！」
「そう！　その意気ですぞ、鬼丸殿」

こうして鬼丸は、タイム村のリーダー格の男の下で体を鍛える日々が始まったのである。

「ちなみにアンタ、名前なんて言うんだ？」
「名か？　名は『カルム』と言う」
「カルムか・・・あだ名はそうだな・・・オヤジだな！」
「オヤジ？　何だ？　それは？」
「細かいことは気にしない気にしない。じゃ、水汲み行ってくるぜ、オヤジ殿」
「オヤジ・・・何なんだ、一体？」

そしてカルムは『オヤジ』という言葉について考える日々が始ま

ったのである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4484z/

勇者鬼丸奮闘記

2011年12月19日02時52分発行